

平成29年度第1回岡山市総合教育会議

日時：平成29年11月21日（火）

場所：市庁舎 第3会議室

○司会 定刻となりましたので、ただいまから平成29年度第1回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日は全員のご出席をいただいておりますので、会議は成立しております。

傍聴の希望がありますが、入室を許可してよろしいでしょうか。

〔「異議なし」の声あり〕

○司会 傍聴者の入室を許可します。

〔傍聴者入室〕

○司会 それでは、協議事項に移らせていただきます。

議事の進行は、招集権者である市長にお願いしたいと存じます。市長、よろしく願いいたします。

○市長 それでは、次第に沿って議事を進めます。

その前に、教育大綱をつくる過程で本当にお世話になりました。いい大綱だったというように思います。ここで書かれた話、我々として是非実現をしていきたいというように思っているところであります。実は前回の総合教育会議から今回の間に選挙もございました。教育の問題については、この総合教育会議での内容を実現するというようなことを私も申し上げて再選を果たしたところであります。これらについて一緒になって、いい岡山の教育を目指していきたいと思っておりますので、よろしくお願いを申し上げたいと思っております。

それでは、議事を進めます。

この総合教育会議では、平成27年5月以来、12回にわたり議論を重ねてまいりました。議論を踏まえて、「学力の向上」と「問題行動等の防止及び解決」を目標に掲げた「岡山市教育大綱」を本年2月に策定いたしました。

本日の会議では、まず、大綱策定初年度の上半期における取組状況や、学力や問題行動等に関する全国調査の結果について報告をしていただき、それらを踏まえて議題や今後の方向性などについて議論をしていきたいと考えております。

また、岡山市中学校長会の下村会長、岡山市小学校長会の青木会長にも議論に入って

いただき、学校現場における変化や取組、またご提案など、幅広いご意見をいただければと思います。

それでは、下村会長、自己紹介をお願いいたします。

○**下村中学校長会長** 岡山市の中学校長会の光南台中学校長をしております下村といたします。どうぞよろしく申し上げます。

昨年度この会議が5回とたくさん開かれて、今年度はいつ開かれるかなというふうに少し期待をしながら、反面どきどきもしながら今日は参加させていただいてます。中学校の現状について少しお話ができればというふうに思ってます。今日はどうぞよろしく申し上げます。

○**市長** ありがとうございます。

では、青木会長、お願いいたします。

○**青木小学校長会長** 小学校長会の会長をしております青木と申します。福浜小学校から参りました。同じく昨年度まで本当に諸先輩の先生方も含めて教育大綱ができ上がったということで、小学校長会としても気を引き締めて岡山市の教育に当たらないといけないということで、今一致団結して前に進んでいるところでございます。ただ、本当にいろいろな課題が山積をしております、本当に教育委員会、岡山市のお力添えをいただきながら岡山市の子どもたちのために頑張ってまいりたいと思っております。どうかよろしくをお願いいたします。

○**市長** ありがとうございます。

昨年度に引き続きまして、ベネッセコーポレーションの西島さん、また梅田さんにもご参加をいただいております。よろしくお願い申し上げます。

それでは、議事を進めたいと思います。資料1について、教育長から説明をお願いいたします。

○**菅野教育長** 教育長の菅野でございます。よろしくをお願いいたします。

それでは、資料1についてご説明します。

教育大綱に掲げた取組の進捗状況につきまして、今年度の全国調査、全国学力・学習状況調査の結果とその分析を中心に報告をしてみたいと思います。

資料1の1枚目をご覧ください。

本資料は、今年4月に実施されました全国学力・学習状況調査の結果とその分析、そこから導き出した今後の課題についてまとめたものでございます。

上段の表をご覧くださいと思います。全国学力・学習状況調査の偏差値の状況をまとめております。

今年度の調査におきまして、小学校では全ての科目で偏差値が50以上となり、中学校では49という結果でございました。小学校では全国平均を上回り、中学校は昨年度より全国平均に近づいてきている。教育大綱に掲げている目標値には到達しておりませんが、上昇傾向にあると認識をしております。その要因といたしましては、教育委員会がリーダーシップを発揮し、学校と取組の方向性を共有できたこと、ベクトル合わせがしっかりできているということ、それから授業研究が活性化し、よりよい授業づくりが進んでいること、無解答率の低減に向けて各校が目標値を設定して取り組んでいると、そういうことがあると捉えております。

一方、課題もございます。下段をご覧ください。

児童・生徒に対する質問紙調査の結果から、中学生の家庭学習のほうに大きな課題があるということが明らかになってきました。子どもたちが自分で計画を立て、主体的に学習に取り組むよう、子どもたちや家庭への働きかけについて各学校の取組を支援するような方策が必要であると認識しております。

続いて、2枚目をご覧ください。

この資料は今年10月に公表されました平成28年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査の結果とその分析、そこから導き出しました今後の課題についてまとめたものでございます。

まず、暴力行為でございますが、全国の傾向と同様、岡山市でも中学校で減少している一方、小学校で増加しております。岡山市の特徴としては、小学校で対教師暴力が増加、年間10件以上発生した学校が増加していることなどから、小学校での指導方法や指導体制に課題がある。また、繰り返し暴力を起こす子どもへの指導の改善が必要であるという分析を行いました。

次に、不登校は、中学校で前年度より減少し、出現率は全国平均を下回りました。目標値以下というのを実現しております。一方で、小学校は過去最多となりまして、教育大綱の目標値との差が広がりました。特徴としましては、1人当たりの欠席日数が多い、前年度からの継続が多いなどがございます。集団での生活や学習に困難さを抱える子どもが増える中で、個々の子どもの状況に応じた効果的な支援が必要というふうに分析を行ったところでございます。

以上の分析から、次の2点を今後の課題といたしました。

1点目は、小学校における指導・支援の充実で、教育委員会による指導・助言の徹底による校内の体制強化、またケース会議や研修会の充実による教職員の指導力の向上などを特に小学校において強く進めていく必要があると考えております。

2点目は、専門家を活用すること、また専門機関や地域との連携・協働ということで、例えばスクールカウンセラーなどを活用した子どもたちの対人関係を築く力、コミュニケーション能力も含め、そういった力を高める取組、これを行うことにより問題行動の未然防止をさらに進めてまいりたいと考えております。

3枚目をご覧ください。

この資料は、大綱策定時に大綱の実現に向けまして注目していきたいと指標ということで取り上げた10の項目について、現在把握している最新の状況をまとめたものでございます。

学力に関する項目については、先ほど説明しましたように学力が上昇傾向にある要因を裏づけるデータとなっております。1、2の項目については、改善傾向にあり、多くの項目で目標値を達成しております。無解答率について改善が見られ、学力調査に対して学校や児童・生徒がこれまで以上に前向きに取り組んで、粘り強く取り組んでいるということもわかります。3、4の項目、模擬授業や事例研究など、実践的な研修を行ったり、ふだんから校長が校内の授業を積極的に見て回ったりするなど、組織的、実践的な授業改善に向けた取組が各学校で進んでいることがわかります。

問題行動のところ、5、6、7の項目については、中学校で改善傾向にあるものの、小学校では前年度より課題が大きくなっているという問題があります。9、10の項目からは、部活動の週1日の休養日、教職員の定時退校日の設定及び実施が全校で行われ、教職員の教材研究や研修などを行う時間の確保、教職員のワーク・ライフ・バランスの実現につながっているものと考えております。3、4、9、10、そうした項目など、市全体で取り組むことについては、ほぼ100%の学校で実施ができており、市立学校が同じ方向を向いて学校教育の変革に向かって取り組んでいる、そういったことも数字としてあらわれてきております。

今年度、私はこれまでに30校近い学校を訪問してまいりましたが、授業参観や校長からの聞き取りにより、校長をリーダーとした各学校の課題解決に向けた取組への意欲、姿勢、雰囲気が大変よくなってきていると実感しております。例えば、校長先生の動き

についてであります。学力向上の取組を尋ねますと、本当に自信を持って、こうですというふうに答えられます。どの学校でも同じでした。それから、教室を本当によく回ってくださっていて、それがよくあらわれるのが、子どもとの関係がとていいんですよ。本当にフレンドリーで、しかもきちっとした規律を持ったつき合い方をされている校長先生が非常に多い。よくいい関係を非常に築いていられるというふうに思いました。

そしてまた、例えば授業で「めあて」と「まとめ」をちゃんとやりましょうというような、「授業これだけは！」という取組がございますが、どの学校でも必ず板書に「めあて」「まとめ」が残されています。校長先生そして教育委員会が持っている教育理念が学校では廊下にとどまるが多かったんですが、いやいや、もう今は教室の中に入っているなということを感じた次第でございます。私はそういったことが学力向上については成果としてあらわれてきているように思います。しかし、まだ目標を達成したわけではございません。この結果が改善の方向に向かっていないというものもございます。今後も大綱に示された取組を教育委員会と学校が一丸となって着実に実行していく、粘り強く実行していくということで課題の解決を図っていきたいというふうに思います。

以上で報告終わります。

○市長 どうもありがとうございました。

引き続き、資料2について、ベネッセコーポレーションの西島さんからご説明をお願いいたします。

○ベネッセ(西島) ベネッセコーポレーションの西島でございます。資料2のご説明をさせていただきます。

資料2には大きく2点の内容がございます。1つは、今教育長からもありましたけれども、全国調査の結果の分析を少し掘り下げてご報告をいたします。また、後半のほうでは、国の文教政策、今年度の動きのあたりを少しご紹介をしたいと思っております。では、開いていただきまして、内容的にはまずは結果分析というところで、大きく3つの観点で分析をしております。

まず1つ目は、岡山市様からデータをお預かりしまして、学校質問紙・児童質問紙・生徒質問紙の全国との比較のところをしております。それから2つ目は、全国データではございますが、学力調査の結果と相関が高い質問紙項目が何かということをご紹介を

したいと思います。そして最後に、岡山市様の児童・生徒の方の学力調査の結果によって4つの層に分けまして、どういった差が層ごとにあるかということを見ていきたいというふうに思います。

では最初に、学校質問紙の小学校の全国との比較というところで、2ページからご説明を申し上げます。時間の関係で一つ一つには触れてまいりませんが、概要としてこういった傾向があるというところでご説明申し上げます。

なお、ここにあります数字は全て選択肢1を選んだ割合になっておりまして、「当てはまる」ですとか「とてもそう思う」といったところで、非常にシャープな本当にやっていると自信を持って答えられているところを数値化したものになっているというふうにご覧いただければと思います。

小学校学校質問紙の全国との差が大きく開いて岡山市様が上回っている質問をここに並べております。赤字、青字にしておりますが、先ほど教育長からありましたように「目標」あるいは「振り返る」というところの徹底はもうすばらしく、方針どおりに学校としてはやっつけらっしゃるというふうに思います。また、授業改善という意味では、協働的な学び、特に「話し合う」、「発言や活動の時間を確保する」といったあたりも全国に比べて非常に高い値を示しております、この次の学習指導要領に向けての先取りの授業改革というものが進んでいるかと思えます。

また、特徴的なものが一番下にピンク色で網かけをしておりますが、「家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えるようにしました」というところが、昨年度に比べて、一番右が昨年の岡山市様との比較になりますが、昨年度に比べて大幅に上がっておりますし、全国との差も大きく開いて上回っているものになります。単に宿題を出すということだけではなく、どのように家庭で学習をしたらいいかという方法まで具体例を挙げながら指導しているというところが家庭学習の充実、ひいては学力の向上というところに結びついているかというふうに思います。

続きまして、次のページは逆に全国と比べて下回っている値のものになります。下回っているものを幾つか見ていきますと、一番最初のところで「校長先生、見回っていますか」というのは、これは昨年度の状況はどうかというところでいくと下回っていたんですが、先ほど教育長からもありましたように今年度はそのあたりの改革といいますか、校長先生、非常にしっかり見回っていらっしゃるというような状況で、もう大きく改善をされているところだと思います。

また、赤字にしていますところでは、「授業研究」、「校内外の研修」、「教職員同士の協力」といったところで、研修ですとか先生方同士での学び合いといえますか、そういったところはまだまだ改善の余地があるのかなというふうに思います。先ほど研修のお話も教育長からありましたが、時間との兼ね合いもあります。こういった形で効率的かつ効果的な研修をしていくのか、また校外、校内外というふうにかかれておりますように校内にとどまらず、さまざまな知見をどう学校の中に入れてくるかというあたりの改善の余地がまだあるというふうに見ております。

続きまして、今度は児童質問紙の結果で全国より上回っているものというものになります。こちらでも赤字にしておりますが、同様に「目標」、「振り返る」というところは、しっかり児童の皆さんに通じている、届いているということが言えます。しっかり浸透していると。また、真ん中に青字で幾つか色をつけておりますが、「きまりを守る」、「助けている」、「認め合っている」、「楽しい」、「ボランティア活動」、「読書」ということで、こういったところの値が全国に比べて非常に高い学校のご指導の状況というふうに思います。非常に人が育っているといえますか、勉強、勉強ということではなく、人として大きくなっているなというところが見てとれます。非常にすばらしい学校環境が整い、指導もされているということかというふうに見ております。こういったところが学力の向上にもつながっていくんだなというのを改めて感じました。

次のページですが、こちらは逆に児童質問紙で全国との差が低いものになります。

ここが低くても問題ない項目でございます。学習塾の問題あるいは時間が余ったという児童が少なかったということは、もっともっと頑張っただけだったという思いのあらわれでしょうし、学習時間にかかわるところ、過ごし方にかかわるところも、よい形でマイナスになっているというふうにもいいかなというふうに思います。

それから続きまして、今度は中学校のほうになります。

学校質問紙、同様に全国との差が大きく開いて岡山市様が上回っているところが6ページになります。

同様に、「めあて」、「目標」のあたりは高い値を示していて、中学校においても教育委員会様のリーダーシップのもとで方針がしっかり徹底されていっているというふうには言えるかと思えます。また、青字のところですが、家庭学習に関しては、ここでは「宿題を与えましたか」というところで高い値を示しています。先ほどの小学校と比べていただきますと、宿題を与えるかどうかではなくて、小学校の場合はどう勉強したら

いいかということをしつかり子どもさんに伝えてらっしゃると。そこは中学校はないけれども、宿題は与えているというふうな状況かなというふうに思います。

ただ、宿題を与えているんですが、青字をつけている「家庭学習」のところの一番右の列、昨年度との比較を見てくださいとマイナスになってます。つまり昨年度はもっともっと宿題を与えていたけれども、何か違うなということでも少し宿題を減らしながら、どうしたらいいかというのを考えていらっしゃる段階かなというふうには思いません。また、授業改善という意味では、「探究」、「話し合う」という緑字にしているところ、こういったところも高くなっておりますので、授業改善の努力もかなりされているところだろうというふうに思っております。

次のページ、7ページですけれども、今度は逆に全国との差が開いてマイナスになってしまっているところですよ。

一番上の行は、先ほども小学校のところでありましたが、この4月の調査時点ではマイナスでしたが、既に今年度の改善がなされているところだというふうに認識しております。

この中学校の下回っているところで非常に課題だなと思いますのが、赤字のところですよ。「私語が少なく、落ち着いていると思いますか」が低い、「礼儀正しい」が低い、また一番下の「学習規律の維持を徹底しましたか」が低いということで、こういった規範意識といいますか、学習規律といいますか、そういったところが全国に比べて低いところが改善の余地があるところだろうというふうに思いますし、また緑字で「家庭学習の課題の与え方」、これ、先ほどのとおりで、宿題を出すだけではなくて、どういうふうに与えるかというところの検討がまだまだ進んでいないところがあると。下から2つ目の「保護者に対しての家庭学習を促す」というところも同様でございます。それから、青字のところは、学力調査の結果の共有ですとか改善のための活用というのがまだまだできる余地があるかなというところでございます。

続きまして、生徒質問紙、中学校の生徒さんの回答になります。

こちら赤字のところにありますように、やはり目標をしつかり認識をしながら授業を受けるというところは浸透しているところでもあります。また、「話し合う活動」、「話し合いをしながら整理する」といったところで、先生方の授業改善の努力がここにもちゃんと伝わっているというふうな状況であります。また、「ボランティア」ですとか「認めてくれる」というふうなところで、人と人との関係もよくなっているのではな

いかなというふうに思っております。

逆に、今度はマイナスのところは次のページになります。

生徒質問紙での全国から下回っているところというところで、「家での学習」、「宿題」、それから「授業時間以外での学習」というところで、やはり家庭学習に課題があるかなど。全体として数字的には余り全国との差が大きいわけではありませんけれども、家庭学習にやはり課題があるというのは、先ほど教育長がおっしゃったことと近いことかなというふうに思っております。

以上の質問紙の結果をまとめましたのが10ページになります。

小学校の場合は、目標・振り返りの指導徹底、それから協働的な学習の充実、それから具体的な家庭学習の方法指導というところで、それがしっかり児童の方に伝わって、目標・振り返りの浸透ですとか、あと他者との関係性の構築ですとか、あと宿題をやっていますかというところも全国に比べても高い値を示していますし、非常にいい形で回っているんじゃないかなというふうに思います。

一方で、中学校のほうですけれども、学校質問紙の特徴としては、小学校と同じように目標・振り返りの指導を徹底されており、協働的な学習の充実をされており、また宿題を出すということをやっているらしいです。宿題を出すのか、あるいは家庭学習の方法を指導するのか、このあたりの違いが少しあるかなというふうに思いますし、その結果として、右側にありますが、宿題の遂行としては、やってるかどうかというところでいきますと全国から少し低い値になってしまっていますし、家庭学習の方法の具体的な指導というのもし低い値になっています。

ですので、この宿題を出すだけではなく、どのように家庭学習をしていったらいいのかと。特に中学校の場合、部活で疲れて帰ったら寝てしまうということもあつたりしますので、そのあたりも含めて、どのように生活を形づくっていくかというところを規範意識の未成熟状況等も含めて行っていく必要があるかなというふうに思っております。

以上が質問紙のまとめになります。

次のページでは、教科学力結果と相関の高い質問項目というのを全国のデータから引っ張ってきたものになります。どういった質問項目にイエスと回答している児童・生徒が学力調査の結果が高いかというふうな相関になります。

小学校も中学校も同様なんですけれども、「国語、算数、数学の問題を最後まで解答しようとしたか」という、そういった意欲のところは最も高い相関を示しています。選

択肢としては、下にありますように1を選んだ児童・生徒の皆さんです。「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した」という方が成績が高い傾向があるというふうな結果になっています。その結果は下のグラフのとおりなんですけれども、それが岡山市様の状況がどうかというところで比較をしてみています。

左側、小学校ですけれども、国語の問題についてということで、全国で先ほどの質問に1と回答された児童の比率よりも岡山市様のほうが高くなっています。それが平成27、28、29と見て、幅が広がっているのが見てとれるかと思えます。だんだん全国平均よりも、より多くの児童の方が最後まで解こうという意欲を持って解答されているというのがわかります。算数についても同様でございます。全国との差がだんだん広がってきているのがわかるかと思えます。

一方、中学校のほうですけれども、中学校は逆に全国よりも上の質問に対する1の回答者が低い、割合が低い形になってます。とはいえ、過去に比べるとだんだん差が詰まってきているというのがわかるかと思えます。この差が詰まってきて、いずれは、できれば来年度は小学校と同様に逆転をしていくというふうな流れができていけば、また全体の傾向、結果の傾向も変わってくるのではないかというふうに思えます。こういった意欲の部分ですね、解答の意欲の部分のところが非常に重要だということがわかるかと思えます。

続きまして、3点目になります。3つ目の観点では、層別分析というものを行っております。

右の図にございますように、全教科の合計正答数が高い順に児童・生徒の方を並べて4つの層に分けて、層ごとにどのような学習行動の差があるかということ質問紙の回答状況で検証をしています。

左側に丸が3つありますが、真ん中にありますように、まず最初は層Ⅰと層Ⅳを比較して、層Ⅰの方はどういう特徴があるのかということを見て、その次にⅠとⅡ、ⅡとⅢ、ⅢとⅣのそれぞれの差を見て、例えば層Ⅳのお子さんを層Ⅲに上げるためには、こういったことを気をつけていかなきゃいけないんだろうかというふうなヒントになるようなデータをお持ちしたところでございます。こちらも選択肢1、「当てはまる」、「そう思う」というふうに回答された数字を集計した値でパーセンテージを示しております。では、小学校のほうから参ります。

まず、層Ⅰと層Ⅳの差が大きいところですね。層Ⅰの児童の方が層Ⅳの方を大きく上

回っているところということで、一番右のⅠ－Ⅳのところでは相当したものになっています。全体としては「算数」という文字がたくさん出てまいります。算数に関する意識ですとか学習方法ですとか、そういったところの差というのが全体に非常に大きな差になっているということがわかります。

次のページですけれども、今度は層Ⅰと層Ⅱの差ですので、層Ⅱの児童の方が層Ⅰに上がるには、この辺が違うんだなということを認識をしながら指導されるといいかなと思うんですけれども、ここでもやはり「算数」という文字がたくさん出てまいります。また、「家での勉強」、「学校や家以外の場所での勉強」ということで、家庭学習、校外学習の差というものもここで出てくるところでございます。層Ⅱの児童の方には家庭学習どうやってやったらいいかということをもう少し詳しく指導する必要があるのかもしれないなというところになります。

続きまして、層Ⅱと層Ⅲの差でございます。16ページでございます。

今度はここも「算数」が多いんですけれども、ここで目立ちますのが、「授業」という言葉になります。つまり層Ⅲの児童の方は、ちょっと授業についてこれていないという状況かと思えます。層Ⅱの児童の方は、授業にはついてこれているけれども、家庭学習が足りていないと。層Ⅲの児童の方は、授業にもっとしっかり踏み込んで考えると、授業の中でしっかり考えるということはどう導いていくかというところがポイントになるというふうに思えます。

続きまして17ページですが、層Ⅲと層Ⅳの差になります。

こちらでも「算数」が多いんですが、さらに「授業」というところに注目されるどころかと思えます。ここでは上から2つ目にありますように、この層Ⅳの児童の方は「めあて・ねらいが示されていたと思いませんか」ということで、半分より少ない児童の方しか示されていたとっていないと。つまり恐らくほぼ100%の授業で先生は示されているんですけれども、そこにもなかなか気づいていないといえますか、そこがわかっていない状況で授業を受けているというのが、こういった層Ⅳの児童の方かと思えます。もうクラス全体の指導というのはなかなか難しいところもありますので、学習補助をどのようにやっていくか。そこにボランティアの方をどう絡めていくかというあたりも考えていかなきゃいけないところかなというふうに思っています。

以上のところをまとめてみますと、次の18ページになりますが、層Ⅰ、層Ⅱの差は算数の学習法、意識、それから家庭学習・校外学習の時間、層Ⅱ、層Ⅲの差はそれに加え

て授業での主体的な思考・表現ということ、それから層Ⅲ、層Ⅳの差は授業で行われている学習活動に意欲的にどう参加できるようにしていくのかということ、また特に算数に関しての意欲というところが違いになっています。

同様に中学校のほうを見てまいります。

大きな傾向はかなり近いのですが、層Ⅰと層Ⅳの差を見ますとやはり「数学」と「家庭学習」というところに大きな差がございます。

次の20ページですけれども、層Ⅰ、層Ⅱの差でいきますと、「自分で考えているかどうか」というところに差が出てまいります。層Ⅰの生徒さんは「自分で考えている」というところにイエスと答えられますが、層Ⅱの生徒さんはそこが少し弱いというところが見てとれるかと思えます。

それから次のページ、層Ⅱと層Ⅲの差になります。

ここでは一番聞いているのが、先ほど全国の傾向から相関が高いと申し上げました「最後までやり抜く」といったところですね。「最後までしっかりと解こうと努力する」というところ、あるいは3つ目に「数学を解きながら諦めずに方法を考える」というところ、こういった問題を解くだけではなくて、授業の中でも最後までやり抜くといったところの差というのが、このⅡとⅢの差になってるかなというふうに思いますし、また「宿題をしているのか」ということ、あるいは「学校以外での場所で勉強」ということで、家庭学習についても差が出ているかなというふうに思います。

それから、層Ⅲと層Ⅳの差になりますが、こちらでいきますと「部活動」という言葉が出てきます。層Ⅳの生徒の方が層Ⅲの生徒よりも部活動の参加率が低いというのが少し段差が出てきていると。学校での居場所ですね、そういったところがしっかり層Ⅲまでの生徒さんはあるけれども、層Ⅳの生徒さん、もしかしたらそういったところも少し少ないのかもしれないということが言えます。また、生活習慣ですとか授業への参画というところが課題になっているのかなというふうに思います。

以上まとめますと、23ページのようになります。

繰り返しになりますので全部は言いませんが、各層の差を認識をしながら、こういった声かけをしていくのかということのヒントになればというふうに思っております。

では最後に、国の文教政策の動きということで少しご紹介をさせていただきます。

今年度、次の25ページになりますが、義務教育におきましては、次の学習指導要領が公示され、関連の資料も提示をされています。来年の春から移行措置が開始をされると

いう形になります。また、高等学校、高大接続という観点では、この間非常に大きな動きがありまして、大学入試センター試験が新しい大学入学共通テストというものにかわっていきます。その問題例がこうなりますということが公表されており、非常に大きな改革がなされているところであります。

では、少し詳しくご説明申し上げます。

次の26ページですが、教育改革のスケジュールということで、これも先生方皆さんご承知のことだと思いますけれども、来年度から小・中学校移行措置に入っております。小学校に関しては、2020年度が新指導要領全面実施ということですが、外国語活動それから外国語科に関しては、かなり先取りしてやりましょうというふうなことが動いております。それから、中学校におきましても、英語について大きな動きがあり、再来年、現中1生が中3生になったときの全国学力・学習状況調査では、英語の実施がなされます。時々理科が入って国語、数学、理科と3教科になることがありますが、英語が入って3教科ということにこの年はなります。4技能ということで、話す、聞く、それから読む、書くですね、全て4つの機能を測るような英語のテストをやりますということで公表をされています。

続きまして、高等学校のところですが、こちらは学習指導要領はまだもう少し先になってまいりますけれども、高校生のための学びの基礎診断というものが2019年度から実施をされ、義務教育範囲と高等学校必履修科目をテストしますということが発表されています。また、大学入試に関しても、2020年度の高3生、現中3生が対象になりますが、入試が変わりますということが言われておりまして、センター試験が今のイメージの問題ももちろん出ると思うんですけれども、そこに記述式が導入されたり、思考力、判断力、表現力、マーク式ではなく記述式も含めてやりますということですか、英語の4技能も入試になりますということで、大きく変わってまいります。

また、センター試験だけではなく、個別試験についても多面的、総合的評価ということで、教科のテストだけではない形で、さまざまな力を評価をしていこうという動きをしている。まだ具体化はこれからですが、研究がなされているところであります。

次のページですが、入試センター試験の記述式問題の導入ということで、これは前にもご紹介しましたので詳しくは触れませんが、学習指導要領の改訂のポイントということで、こういった力をしっかり育てていくんだということにあわせて入試も変えていこ

うというふうな動きです。大学入試は小学校・中学校の先生方には直接的には関係ありませんけれども、入試がこう変わっていくということで少しご覧いただいて、入試のために勉強するわけではありませんが、入試も一つの機会でありまして、まさに今小学校では特に国語Bの力が強い児童の方が多い岡山市様ですので、そことのつながりなんかも見ていただければと思います、お持ちしております。

次のページ、国語の問題なんですけども、一般的には国語ですと評論文ですとか小説が出てくるんですが、契約書を題材とした問題例が出ておりまして、右下に赤枠で囲んでおりますけれども、「契約書に沿って、どの条文の、どのような点について質問したらよいと考えられますか」ということで、答えが1つに決まりにくい問題が大学入試で出てまいります。今のB問題もこれに近い形かと思いますが、B問題が強い岡山市様にとっては、非常になじみやすい問題になってくるかもしれません。

次のページは、同じく設問がもう一つありますけれども、「アドバイスをどうしたらいいかということを書きなさい」ということで、ある程度条件がありますので、絞られてくるような問題ではありますけれども、答えが1つに決まらない問題を出していこうとしているというところです。

また、数学におきましても、30ページにありますように右下、赤枠で囲んでますが、答えを出せではなくて、「確かめる方法を記述しなさい、説明しなさい」というふうな問題になっています。公式を当てはめて答えを出すということではなくて、どう考えたらいいかということ問うような大学入試に変わっていくというところがあります。

このように小学校・中学校も大きく変わってきておりますが、高校も含めて、あるいは大学入試も含めて、今教育全体が大きく動いているところでございます。そのような中で、今岡山市様の改革が進んでいるというのは非常に時代の先取りでもあるかなというふうに思っているところでございます。

以上になります。ありがとうございました。

○市長 ありがとうございました。

今、教育長と西島さんからご報告をいただきましたが、これらにつきまして今日の出席者皆さん方からご意見をいただければと思います。

まず、どなたからでも結構ですから、よろしく願い申し上げます。

では、まず石井さんからですね。

○石井委員 まず、今回の学力調査結果についてですけれども、2月に教育大綱を策定さ

れて、本当に期間としては短期間の間になるんですけれども、さまざまなベネッセさんが示していただいた数字からも、教育委員会で頑張ろうというふうにした項目について、お題目だけではなくて実際の行動にまで結びついているということを確認することができましたし、またその結果、関連する学力についても一定の上昇が見られているということは評価いただけるところではないかなというふうに考えております。

あと、課題について挙げていただいた家庭での学習の充実ということも、このような形でデータに基づいて統計的に出していただくというのが非常に価値があることかなというふうに思っております。保護者の立場としてでも、お示しの中にありましたけれども、宿題を与えられるだけではなくて、どのように学習したらいいかということも踏まえて指導いただけるというのは非常に価値があるかなというふうにも思っております。さらにもう少し踏み込んで、例えばなんですけれども、家庭学習する中で親として関心があるのは、リビングで勉強するのが効果が高いのか、個人の部屋で勉強するのがいいのかとかというのがよく親の中で話題になったりするんですけれども、それがじゃあデータとして、今回の項目の中にはそんな質問項目ないと思うんですけれども、じゃあどっちが効果あるのかとか、親がどんだんどん勉強しろ勉強しろというのがいいのか、それともそうじゃないのがいいのかとか、いろんな親から見たときの視点とか、朝御飯食べたら、どんだけ学力に相関関係があるのかとか、さまざまいろんな項目があると思うんで、そういうあたりをもっともっと保護者の視点として知りたいなど。

単純に勉強の時間だけじゃなくて、より効率的にどうやったら学力が上がるのかというのを是非教えていただいて、それ、皆さん興味持たれてると思うんで、非常に取り組みやすいんじゃないかなというふうに思いました。

○市長 ありがとうございます。

大綱が今年の2月ですけれども、それを大綱を策定するに当たっては約2年間議論してますから、後で校長会の方にお話をいただきたいとも思いますが、ご努力は少し前から当然ながらやっていただいたというような、そういう成果も出ているのかなというように思います。それから、今の朝御飯と学力はたしかデータがありましたよね。ほかにリビングと自分の部屋でやる、それだけに限らないでしようが、家庭学習における、さまざまなそういうデータ分析みたいなものというものはあるんですか。

○ベネッセ(西島) 朝御飯はありまして、データとしてどこまであるかというのがちょっと自信が今はありませんが、リビングと自室というのは、小学校においてはリビングで

学習したほうが成績が上がるというのは一般的には言われているところです。データに基づいて、どこまで検証されているのかというのは今即答できないんですけども、さまざまな弊社の中での調査も保護者向け、あるいは子どもの学習の調査やっていますので、データはお持ちできるかと思っています。

○市長 教育長もこれから家庭学習の充実ということの一つ命題として挙げられているので、家庭学習するに当たっては、どういう勉強の仕方がより効率的なのかというのは整理をしとくということは多分いいことだろうと思いますので、これは西島さんのほうで、また後で調べて教えていただければと思います。

○ベネッセ(西島) かしこまりました。

○市長 そのほかどうでしょうか。じゃあ塩田さん行きましょう。

○塩田委員 大綱ができて、やはり岡山市で取り組む課題で、その目標を2つに絞ってやったというのは非常に効果的だったなというふうに思います。先ほどの西島さんの報告を見ていますと、岡山市の子どもたちは本当に素直だなというふうに思いました。めあてとかまとめをしっかりとするという指導をすれば、ちゃんとそれを実行して児童質問紙でもそれをやっているというところが全国よりも高くあらわれている。本当に素直な子どもたちだなというふうに思います。自尊心も高いですし、自己肯定感もあるということで、きっと言われれば、そういう気持ちになる子たちが多いのではないかとこのを今回非常に感じました。

それを一番感じたのは、学力向上に向けてにもありますけれども、無解答の低減です。ここには学校が無解答率の低減に向けて目標値を設定していると。多分先生はそれに向けて頑張ったのだらうと思うのですが、生徒には無解答率というのは全く関係のないところで、先生がその気持ちを受けとめて、本当にその重要性をしっかりと説明をされたんだらうと思います。それで、児童・生徒が、あ、これは一問一問粘り強く取り組まなきゃいけないのだということを自分が納得して、それで取り組んで、この無解答の低減というのがあったのだらうというふうに思います。

ちょっと調べたのですが、小学校のほうは無解答率、全国よりもほとんどの科目で高くなっていて、中学校のほうは全国平均よりは低いのですが、昨年からの無解答率の減少率というのが全国の減少率に比べて岡山市は高かった。それは本当に児童・生徒がそれだけやらなきゃいけないという粘り強さを見せた結果かなというふうに思って、何かそのことをすごく高く評価したいというふうに思います。それは子どもの力だけじゃな

くて、やはり先生方のご努力というのもすごく大きかったかなというふうに思います。こういった粘り強さがこういう学力向上にもあらわれてくるでしょうし、それが生徒の問題行動なんかにもつながってほしいなということを感じています。

以上です。

○市長 とりあえず教育委員の皆さん方ご発言をいただいて、全体を踏まえて小・中学校の校長会の会長さんからコメントをいただきますので、よろしくお願いします。

じゃあ、藤原さん、いいですか。

○藤原委員 今回大綱ができて、それまで何年か学力向上を目指してとか、いろんな共通課題やってたんですけど、最後の一点集中が図られたかなと思ってます。行政と学校と、家庭の教育力は少しまだこれから課題があるけど、そのあたりが市民を挙げて市全体でその気になっているかなというのを感じました。一番うれしかったのは、さっき西島さんが言われた、この分析の中で、岡山市は人が育てているというのを実感したというのをデータの中から酌み取ってくださったのは、とても我々としたらうれしいし、やりがいがあるなというのを感じました。

今後ますますこれを発展させていくために、この学力向上に向けてのシートの資料1の表紙なんですけども、ここの分析のところでちょっと気になるのが、これ、いろんな会の方がいらっしゃるので、例えば学力が向上した要因で（仮説）となっているんですが、今回のことはこれは検証というのか、分析をした結果、次の来年度やその次に向けての手だてを考えていくときに、もう一回仮説が使えるのかなという感じがしてます。多分実践仮説は絶対必要なことなので、学校現場は学校現場で、それから行政は行政で仮説を立てていると思うんですが、ここに書くのは検証的な学力が向上した要因と考えられることとか結果とかという表現でいいのかなと思っているのですが。

例えば、仮説としたら、事前に、例えば教師の指導力と家庭の教育力の双方が連携すれば子どもの学力は伸びるだろうとかというのが仮説かな。その結果として、例えば授業をこれだけのものを使えば学力向上するであろうという仮説のもとに、結果としていい結果が出ていた、でも今後はまだこれが必要だというふうな持っていき方のほうが、次の年度に向けられるのかなというのを感じました。

そして、さっきのベネッセさんの分析の中に同じ児童の質問紙で、同じ授業をしてるのに、例えば「めあてが示されていたかどうか」というのは差がある。そして、「自分の考えを発表する機会が与えられていたか」、これも同じ授業を聞きながら層によって

差がある。何かそのあたりのことをもっと、じゃあどういう要素なんだろうかというのをどう分析したらいいのかなというのをお聞きしたいのと、もう一つはせっかくベネッセさんがおられるので、この数日間の教育情報の中で、例えば小学校の3年生から4年生で、すごくポイントが下がると、理解の。それは家庭の教育力というか、経済力の格差じゃないかというふうな記事も出てたんですが、格差があるということは前提にはなるんだけど、教育にかかわっている者としたら、それだからということにはならないので、じゃあそれを補完する意味で、3年生から4年生の間に何をしたら、この文科省が今は続けている学力向上につながるんだろうかというふうな、その縦の中での何か全国で見えておられるようなことがあったらお教えいただきたいなと思いました。

○市長 まず、この仮説の定義の問題は、学力の向上した要因分析みたいなものですね、ここは。それは今度直す機会があれば、また修正していただければと思いますが、あと先ほどの藤原さんの質問に対して西島さん、お答えをお願いいたします。

○ベネッセ(西島) まず、層別の分析の中から見えてきた、授業で実際に行われているにもかかわらず伝わっていないというところの課題ですけども、直接的なお答えになるかどうかわかりませんし、是非両校長先生にも後ほどご意見いただきたいんですけども、授業そのものは、ここで言う層Ⅳの子どもたちに向けて授業してしまうと恐らく授業は崩壊します。どちらかという層Ⅰ、層Ⅱの子どもたちが満足するような授業にしていきながら、いかに層Ⅳの子どもたちをサポートするかというふうにしていかなければいけないと思いますので、もうそこは層Ⅰの子どもたちをどう使って層Ⅳの子どもたちをサポートさせるか。クラス内ですね、同学年のクラス内で友達同士でサポートさせるかということを考えることと、もう一つはもう外の力といいますか、ボランティアの方ですとか学習支援員の方ですとか、そういった方をうまく活用していくといったことが必要かなと思います。

どうしても授業に心が向いてない子どもたちもいると思いますので、そういった子どもたちができるようになったという実感を持ちながら授業に向いていくように仕向けるためには、そこにはやはり一定のパワーがかかると思いますか、手をかけなきゃしょうがないところだと思うんですが、手のかけ方って、すごく難しいと思うんですね。ですので、授業を担当の先生といいますか、先生ご自身は層Ⅰ、層Ⅱの子どもたちのことをしっかり考えながら授業をしていきながら、層Ⅳの子どもたちを誰にサポートしてもらうかということを考えなきゃいけないんじゃないかというふうに思っています。

それから、2つ目のご質問ですけれども、小3と小4という話だったと思うんですけども、その小3と小4の差が何かということ、前から言われるのは授業の中身が抽象化されいく段階がそのあたりにあるということで、特に算数なんかは目に見えないものがだんだん使われていく、現実のものではなくて抽象化しながら考えなきゃいけない図形ですとか分数ですとか、そういったものが使われていくというふうなところが大きな違いだというふうに言われていますので、抽象化した思考がどれだけできるかというところが、これはもしかしたらなんですけども、大人の人との会話の量とか、そういったことがもしかしたら違うのかもしれない。

そういう意味では、家庭で保護者の方と子どもがどういう会話を交わしているのかというの、経済格差等ももしかしたら関係があるかもしれませんが、抽象化した話がどれだけふだんできているのかという、会話でできているのか、そこに慣れていって授業にも入りやすくなっていくのかというのが少し違いがあるかなというふうに思っています。

○市長 では、奥津さん、お願いいたします。

○奥津委員 大綱が目標値という形で示されたことによって、ある程度余分な議論というか、何かああも見える、こうも見えるというようなことで、結果分析の上でのいろんな無駄なことが省けているんじゃないかなというような印象を私は持っています。そういった意味で、またそれに向かって全体が頑張っていこうじゃないかというような機運が生じてるというので、非常にそういった点で意味があるのかなと思っています。

今回出された資料1にしても資料2にしても、問題として挙げられているのが家庭の学習に関してのことが1つありまして、ベネッセさんの22ページあたりが非常に如実かなと思うんですが、層Ⅳ、特に私、中学生の層Ⅳに非常に興味があります。大綱の目標についての学力の問題にしても問題行動にしても、恐らく層Ⅳの生徒たちがキーポイントというか、キーを握っているんじゃないかなというふうに思います。その中で分析されてる結果で見ますと、もちろん家庭学習の時間が少ないというのは、そうだろうなというところもあるんですが、全体的な意欲だとか、特に部活動とか、部活動の参加率が低い、ほかに比べてもですね、とか放課後に何をして過ごすかということでも勉強はしてないしという。朝食のこともちょっと出てきたりもするんですけども。

そういった意味で、この層Ⅳの子たちは、じゃあ何か生きがいというか、将来の目標だとか、こういうことに頑張ろうとか、そういったものを持っているだろうか、どうな

んだらうかと。また、家庭環境とか社会での居場所だとか、極端なことを言えば、そのあたりのことまで、どういうふうに日々生活してるんだらうかというようなことに興味があるというか、それが余り理想的じゃないとか、本人たちにとって、もうそういう迷い続けているというようなことなんであれば、それを何とか助けてとかサポートするか、そういうようなことにやっていくというのが必要になってくるのかなというのが、この分析の表を見てて何かちょっと浮かび上がってきたなというような感じがしました。

○市長 層Ⅳの子の何か問題意識みたいな、何か西島さんコメントすることありますか。

○ベネッセ(西島) 誰もができるようにになりたいと思って学校に行って勉強して、しようと思ってると思うんですけども、なかなかできるようになったという体験がないまま、恐らくこの層Ⅳになってしまっていていっているということではないかと思しますので、どのようにできた、わかったという体験をつくってあげていくのかということが大事だというふうによく言われていますので、普通の授業の中だけではできないところがあるかもしれませんが、別の時間を使って、あるいは家庭でもかもしませんけれども、何かできるようになったということが体験できるような仕掛けというのが大事かなというふうに思います。

○市長 ありがとうございます。

では、資料1、2、そして教育委員の皆さん方のご意見を踏まえて、青木さんから小学校の実態そして今後の方向についてコメントいただければと思います。

○青木小学校長会長 まず、学力のことにに関して、現場の実態であるとか、また今後の課題、そういったものをお伝えをさせていただきたいと思います。

資料1のほうにまとめていただいています、今回学力が向上した要因ということで、1つは「組織的かつ実践的な授業研究を推進している」ということを書いていただいています。実際、小学校では子どもを主体にした授業研究を行い、日々の授業にそれを効率的に効果的にうまく合わせて実践をしているという状況ではあると思います。実際に子どもにこう言ったら子どもはどう返してくるだらうとか、あるいはこんなことを言うときっと子どもたちは戸惑うんじゃないだらうかと。

例えばうちの学校でいえば、1つの単元といいますか、1つの教科書の部分ですね、それをAクラスからA、B、C、Dあるんですけど、Dクラスまで違うやり方をして、どれが一番効果的か、あるいは段階的に授業を1時間目、2時間目、3時間目、4時間

目というふうに、それぞれのクラスの先生が実際にやってみて、その効果を確認する、それで最終的に本当に子どもたちに学力として身につくような授業になるのかというふうな実践的研究をしております。そういった中から多分効果があらわれてきている。多分これはほかの小学校でも、当然それをしないと意味がありませんので、そういった授業研究をしているというのが実態ではないかなと思います。

あるいは、その下にあるような「学力調査等の結果を効果的に活用している」というふうな文言もあるんですけども、これはまさに教育委員会のほうからしっかりと今までの結果を踏まえて、それをまたフィードバックしながらやってほしいというふうなことも随分いただいておりますので、結果をもとに研究をしている、授業をしているという、そういう実態があらうかと思います。

ただ、私は今日ここに来させていただいてよかったと思うのは、この先ほどの資料2の層別の分析をいただいたことです。と申しますのは、今普通の公立学校でいえば1クラスに35人あるいはそれ以上のいろいろな実態を背負った子どもたちがいます。1つの質問あるいは課題を投げかけても35人が全員違う反応をするわけですね。そういったときに担任の先生は戸惑うわけです。1つの学年の中で1つのクラスの中で発達段階が違う。どの子に対して、どういう教え方をするかというのを十分教師は身につけておかないと、同じ質問をしても全く違う答えが返ってくる。それをきちんと整理をしてフィードバックをしていくという作業がまだまだ要るんだろなということを感じさせていただきました。

例えばここでは4層に分かれています、4層としての実態を踏まえての授業研究がなされているかということ、まだまだそこまでの十分な研究がなされていない。つまり、いろいろな子どもたちの学力の発達の段階をどうクリアしていくかというふうなところに、これからの課題があるのではないかな。もちろん実際には今そういう手だてもやっているわけです。例えば厳しいIV層の子どもたちをどう巻き込んでいくか。そういう子に光を当てながら本当に教えていけないことをどうその子どもたちを巻き込みながらやっていくかということも一生懸命やっはいるんですが、なかなか科学的な根拠をもとにやってはいません。そこは今は先生のスキルに任されているわけですね。

今日はね、こんなことがわかったね、これはね、いつもわからん、わからんと言っていたAちゃんがこんなことを言ってくれたから、みんな今日はこんな新しいことがわかったねみたいなことを一言言うと、その厳しい課題を背負ったAちゃんが、おお、今日は

頑張ったな、よっしゃ、次も頑張るぞというふうな、そういった巻き込み方をする。授業の中でいろんな層の子に光を当てながら1時間の中で子どもたちが満足をして、ああ、やり切ったなと思えるようなスキルがまだ少し足りてないので、今日のような層別の結果も出ているんじゃないかなと。

ただ単に授業をどんどん進めるのではなくて、そこに人間的な教師としてのスキルを踏まえた上で満足ができる授業をつくっていきたいなということで、改めて感じさせていただいたところでございます。

もう一つは、問題行動のところでございます。先ほど藤原委員からもご意見あったと思うんですが、仮説として小学校の暴力行為等が増加ということで、「小学校での指導方法や指導体制に課題がある。また、繰り返し暴力を起こす子どもへの指導の改善が必要である。」、この「また」からはわかるんですが、「小学校での指導方法や指導体制に課題がある。」というところが、なぜここがそういう仮説を立てられたのか、ちょっと見えにくかったかなと。疑義を呈して申し訳ないんですけども。

と申しますのは、小学校の段階で、特定の教師を狙ってということではなくて、発達的な課題を持った子、あるいは家庭の本当に厳しい環境を持った子どもたちが授業がわからなかったり、あるいは授業中、別のことでいらいらしたりということで、突発的にいろんな立ち歩いたりとか言葉を発したりとかということが多いわけですね。そういった子に頑張ろうやというふうに接していくと抑え切れない子どもたちがパニックになって、ついつい手が出てしまうという現状があるわけです。

いろんな指導法や指導体制を持った上でやっているんですが、そういう家庭的な要因であるとか、あるいは発達的な課題によって、なかなか45分間の授業に取り組みない子が増えている。そういった現状の中で先生たちは頑張っているにもかかわらず、難しいところがあるというところの現状も理解をしていただきたいというふうなことも思っているわけでございます。時間がありませんので、もう少しお話をしたかったんですが、そういったあたりもご協力、考慮いただけたらありがたいかなというふうに思っております。

以上です。

○市長 最後の点は非常に重要だと思うんですね。それは全国でも先生が同じような悩みを持ちながらやっているところでありまして、全国平均に比べて、はるかに岡山市が数字的に悪い数字が出てきていることもまた事実であります。これ、事務局、教育長ない

しは教育委員会のほうで、こういう分析をされてる何か具体的な、小学校での指導方法や指導体制に課題があるということを書かれた、その理由みたいなもの何かあればご指摘をいただきたいと思います。

○服部教育支援担当課長 ご指摘ありがとうございました。当然重々教育委員会としましては、小学校の状況・実態を把握した上で、数字の上からも含めての分析です。左側の枠の中に小学校で対教師暴力が増加という点、小学校1年生から3年生までの発生件数が増加、これも倍以上に実はどちらも増えているという実態がございます。こういう倍以上に増えるということは、やはり何かしら課題というか、改善する必要な部分があるんじゃないか、やり方を見直す必要があるんじゃないかという意味合いで課題があるというふうに、すみません、端的にまとめたんで、ちょっとわかりづらかったかと思うんですが、そういうことでございます。

○市長 先生方のご努力はもう十分みんな、我々もよく教育委員会と議論してるんですけども、そこは十分承知をしているところです。でも、さらに何かができないかという議論だろうと思います。そのところはお互い永遠の課題かもしれませんが、一歩一歩前に向いていかなければならないなというように思います。

では、下村さん、お願いいたします。

○下村中学校長会長 先ほどから少し層Ⅳの子どもたちの話題が出ていたので、ちょっとそこに触れさせていただきたいと思います。中学校でも、その層Ⅳの子どもたちというのは、なかなか本当に学習については難しいところです。同じような内容が当然ついていけるという状況ではないです。ベネッセさんのほうからのご指摘があったように、少し特別な手当ををしていかないと、なかなか学力がというようなことでちょっと難しいかなというふうに思っています。ただ、その子らが居場所がないとか将来に希望が持てないというようなことにしたらいけないので、本当にとにかく授業の中身で少し工夫しながら、わかったという経験よりは参加できたという経験のほうで子どもたちを何とかつないでと言ったら失礼ですけど、何とか授業のほうに持っていつているというのが実態かなというふうに思っています。

ですから、教師のほうは、どういうふうに子どもたちの発言の中から子どもを絡めていくかということ、あるいは協同学習であるとかグループ学習であるとか、そういうふうなやり方も工夫しながら、その子らを何とかして取り込む。教師とそれから支援をしてくれる大人の方だけではなくて、層ⅡやⅢの子ですね、その子らがどれだけⅣにかか

わってくれて、うまく引っ張り込んでくれるか。そういうふうなことをしながら、授業のほうは少し研究もしながら、子どもたちを絶対に見捨てないということでやっています。

特別な支援については、放課後に残ったりとか、あるいは中学校ですから受験というところに引っ掛けるといって失礼ですけど、受験という目の前にぶら下がった目標をとりあえずいかにつかむかというところ、達成させるかというところで、何とか興味を引きつけて持っていくというようなところが現実かなというふうに思っています。それだけでも実際に子どもたちは自分は見捨てられてないとか自分にかまってくれるという思いは多分持っていると思うので、そういうことが今までの問題行動の実態としては少なくなっている。先生の言うことに対して、そう口を荒らすというようなことはないような実態が起こっているのかなというふうに思います。

あわせて、例えば無解答のことにもかかわってきますが、無解答率を高くするのに答えを書けよというレベルの話ではなくて、教科の指導の中でもテストの中で諦めずにやろうということは言うにしても、一人一人をちゃんと大事にするという基本的なところが入っていれば、子どもは諦めずに何とかすがりつこうとします。そういう姿勢を今育てていこうということで中学校のほうも頑張りながら、そういうふうな無解答のことであるとか、あるいは少しでも学力を上げるとかというところを引き上げていきたいなというところでやっているところでございます。

実際にどれぐらいまたこれから変わってくるかというのは、もう数字だけで一喜一憂をするわけにはなかなかいかないと思います。ですが、本当に岡山に帰ってきたいという子どもたちを本当に育てたいとか、あるいは少々困難があってもくじけず、またはい上がっていくような子どもたちを育てたいというのが当面の我々の目標であります。そういうところの中で、こういうような今挙がっているような問題が解決できたらいいなというふうに思いながら先生方も指導しているというところではあります。

それから、ありがたいなと思ったのは、このベネッセさんの資料の中に、例えば8ページが藤原委員さんも言っていただきました人が育つであるとか授業の変革が生徒に届いているとかというところは本当にありがたいなというふうに思っています。逆に、気になるのは7ページにあります全国より下回っている質問のところ、これ、学校質問紙は校長が答えたと思うんですけど、「私語が少なく、落ち着いている」とか「生徒は礼儀正しいと思います」というのが妙に低い数字が出ています。これは校長たちはそ

れなりに高いところに持っていきたいという思いがあって、こういう回答をしたんではないかなというふうに思っています。

例えば地域の方が来られたときに挨拶をせんというようなことでクレームがそう来るというようなことよりは、実際には、よう子ども挨拶するようになりましたねというようなことを言っただけのケースのほうが実際に多くて、校長本人にはそうじゃない、なかなか返らんかもしれないけど、子どもとしては、私は市内の中学校の話聞いても、礼儀正しい子どもたちは増えているというふうに思っています。それから、私語のほうもいろんな特徴がありますが、落ちついた学習が以前よりは随分とできているというところで、この数値よりはもう少し高い評価で理解をしてもいいんじゃないかなというふうには思っています。

○市長 ありがとうございます。

ちょっと私の感想も申し上げさせていただきたいと思いますが、教育委員の皆さん、ある程度共通された意見として、この大綱が2つに絞ったと、非常にわかりやすく、岡山市そして教育委員会、先生方皆さん一緒に、方向を一にできたということが今いい傾向になってるんじゃないかということは、私もそういうふうに感じます。そして、私もこの調査結果見て、塩田さんと全く同じように、岡山の子どもって本当に素直なんだなという感じもいたしました。安心をしたところでもあります。

ただ、こういう結果が出てきているというのは、この1年、相当数、先生方、教育委員会また校長さん方のご指導もあって努力をされてるのかなというふうに思うんですが、こういう大綱が出る出ないの頃からというのは瞬間風速では結構頑張れるんですけど、これをずっと継続していくというのは案外難しいわけでありまして、業務量ももちろん部活の休みとかはやってるにせよ、業務量というのが今問題にもなってます。

役人のパーキンソンの法則というのがあるわけで、どんどんどんどん仕事が増えてしまう。もちろん補助をしていただく人を入れれば、そこがよくなるのかもしれませんが、財源的にも一定の限界は当然ながらあるわけでありまして、今ある業務を具体的に少なくしていかなきゃならない。そういう負担軽減の話、これは何度かここで議論が出てますが、具体的なものとしては部活の1日休みぐらいしか私は余りないんじゃないかなと。それはできれば考えて、負担軽減という形で何ができるのかということを考えていただきたいなというふうに思いました。

それから、家庭学習の話も石井さんが言われましたけど、家庭学習の充実、もちろん

これは小学校・中学校の先生方も具体的に話はされてるんでしょうけども、どんなことを家庭学習でやるのか、どんな形がいいのか、これ、家庭もまた千差万別であるでしょうから、なかなか標準化できないところもあるでしょうけれども、でもやはり具体的に示してあげないと保護者は戸惑っていきんで、それを具体的にお願いしたいなということとであります。

私は、3点目が先ほどの下村さんのおっしゃった、この7ページ、全く同じところに問題意識があります。私は、でも結論的には下村さんと全く違うんですけども、それは岡山の中学校の学校側が少し厳し目に物を見てるんだということをおっしゃってたと思うんですけども、通常のアンケート、大体平均値、全体といけば、それほど変わるものじゃ私はないんじゃないかなというように思ってます。そういう面で、全国に比べて岡山市が格段に低いというのは、やはり規範意識に問題があると言わざるを得ないんじゃないかと。これをどうやって高めていくのかということ、もしそれがそうじゃないという分析があるんなら、まだともかくなんですけどね。暴力行為、問題行動等が岡山の場合、多いということもまた事実であります。それを軽減していかなきゃいかん。その対策としての具体性とか、そういったことを議論を是非してもらいたいなというように思います。

教育長、今私だけの話じゃなくて、皆さん方の話に対しても、ちょっとコメントをお願いします。

**○菅野教育長** 今日本当に委員さんも、それからベネッセさんも、そして校長先生方も本当にありがとうございました。次に向かっての我々の取組の目当てといたしますか、そういうものがたくさんいただいたなという思いでございます。先ほど市長さんのほうから話があったんですが、2点に絞って取り組むことを決め、策定した。これが本当に効果を持つというのは、私前に市長さんとそんな話をしたことがあると思うんですが、非常にシャープに目標が設定されたので、わかりやすいということがあるんじゃないかなということを思っています。やはり目標はシンプルなほうがいいと。もちろん取り組み方には本当複雑ないろんなやり方があると思うんですけども、そういうことを今回痛感した次第です。

もちろんこの指標を達成するということが大切なんですけど、実はその達成することを通して、教育委員会としてはやはり教員を育成すること、力を高めていくということがとても大切なんじゃないかなと。これがその時点で終わっちゃいけない。下村校長も言

いましたけども、一喜一憂することではいけないので、ずっと持続していかないといけない。持続していかないといけないとすると、やはりそれはもうマンパワーの向上しかないというふうに思っています。じゃあ、何をやるのかなというようなことをいろいろあれこれ悩むよりも、この学力向上と問題行動についての取組をしっかりと進めていくことで、先生の授業力であったり、先生の人間力、そういったものを高めていく。これが本当にESDですね、持続していく、そういったものになるものではないかなと。これを教育委員会としては、しっかりとやっていかないといけないということを今日の話ではしっかり思いました。

それから、家庭学習というのが今日すごく出てきたと思います。層Ⅳの子にとっても、やはり足りないのは家庭学習なんだろうというふうに思うんですけども、これをいかに家庭と一致協力しながら、その時間数、例えば家庭学習の時間を増やしていくとか、その質を上げていくかということは、これから教育委員会もあの手この手を使いながら考えていきたいと思っています。

そして、私も教員出身者ですから1つ言うと、家庭学習だけではなくて問題行動のさまざまな部分も、実は家庭にいろんな要因があるということも知っています。例えば、不登校で、もしお母さんがちょっと背中を押してくれたら不登校でなくなるのになとかというようなことも多々経験しています。つまり家庭に原因を全て押しつけるということではないんですけども、家庭と協働して子どもを幸せな方向に持っていきたいということもやっていかないといけない。そういうふうなことも思いました。

最後に市長が言われた規範意識のことですけども、これも家庭に押しつけるということではなくて、例えばこれから道徳も教科化されます。今までは評価がなかったわけですけども、そういった道徳のほうに力を入れることによって規範意識を高めていくという方法もとれるでしょう。そして、先生と子どもたちがしっかり人間関係のきずなを深めることによって、先生の後ろ姿で子どもを導いていくということで規範意識を高めることもできるでしょう。このあたりのことも教育委員会に与えられた課題として、また学校とともに取り組んでいく課題として頑張っていきたいというふうに思いました。今日は本当にありがとうございました。

○市長 何かこれだけはこのことがあれば、ご発言をいただければと思います。

西島さん、本当にいい資料ですね、これ。ありがとうございました。先ほどの青木さんじゃないですけども、層Ⅰから層Ⅳのこの分析というのは非常に新鮮な感じがいた

しまして、本当にありがとうございました。

藤原さん何か、どうぞ。

○藤原委員 ベネッセさんにお聞きしたいのが、国の文教施策ということで大学入試が変わろうとしているんですが、全国的に高等学校のあり方がそこまで変わりつつあるのか。それから、文科省が言っているバカロレアがありますよね。あの考え方と今度の共通テストとは、どこかベースが似ているのかどうか。大学なんかでも地元の大学も国際バカロレアを入れていく段階で、そしたら今回アクティブ・ラーニングの考え方が出てきたら、小・中も要はこの学力状況調査は大切なんだけど、それがどう働くかというところまで考えていかないと教育の中では通用しないかなと思うので、ちょっとその状況があったら教えてください。

○ベネッセ(西島) このたびの教育改革は全て通底しているといえますか、小学校・中学校・高校、あと大学入試、あと大学教育も含めて、全体を改革しようとしています。その中で今バカロレアの話がありましたが、参考にしているのがOECDの教育の考え方をベースに全体を設計しようというふうに文科省さんとしてもされているので、グローバル人材をどう育てるかということがベースにあります。

既にバカロレアでやってらっしゃるような授業、指導の一部が日本の小・中・高にも当然反映されている状況にもありますし、反映されていこうとしている状況にもありますので、そこは全部つながっていて、ここの大学入試もまだまだ研究不足なところはあるとは思うんですけども、答えが1つに決まらない、それから社会とのつながりを第一にした出題、そういったことをやることで、そういったことが解ける子どもを育てることで、思考力、判断力、表現力と言ってますけれども、さまざまな課題にぶつかったときに自ら解決していける主体性とか協働力とか、そういったものを育てるような教育にしていきたいと思いますというのが中心の趣旨になっていると思います。

大学教育も含めて、そういった形で、アドミッション・ポリシーからカリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、3つを変えなさいというような形で出てきていると思いますので、そのあたりも全部がつながって、恐らくグローバル人材を育てていくにはどうしたらいいかと。そのときのグローバルの言葉の意味は、当然世界に出ていく人もいますが、日本にいて多様な方々と一緒に働けるとか一緒に生活していけるとか、そういったところも含めたグローバルということだと思いますけども、そういった人材を育成して行って、多様な国のあり方、これから10年、20年、30年後のやり方を見据えな

がら改革していこうというのが趣旨だと思っています。

○藤原委員 高校の動きをお教えいただいたら。

○ベネッセ(西島) 高等学校でいいますと、スーパーグローバルハイスクールというのが全国で何十校か、100校ぐらい指定されていて、そこでもう本当にさまざまな研究がなされています。そういう特殊な学校もそうなんですけども、一般的にももうかなりアクティブ・ラーニングといえますか、授業のあり方の変革というのはなされ始めています。まだまだ入試が今は変わってないので、これからなんですけども、来年の入学生からは大学入試を見据えて授業のやり方を変えようですとか、英語もスピーキングをどんどんやっていこうですとか、そういったことが来年の春から動いていくかなというふうに思っています。

○市長 ありがとうございます。

他によろしいでしょうか。

では、今日はありがとうございます。全体としていえば、本当に教育委員会、校長さん、また各先生方のご努力によって、岡山の子どもの学力向上、問題行動等がよくなっているのではないかなというように思っております。これをさらに続けていかなければということでもよろしくお願ひしたいと思ひます。

ただ、課題も山積をしております。全てを拾うということにはできないんですけれども、それらについての最小限のことはきちっと対策を講じていかなければならないというように思ひます。次回でこの今までの大きな課題について、これからどういふふうに対応していくのかということ少しまとめたいたひように思ひているところでございます。よろしいでしょうか。そういうことで、事務局、お願ひいたします。

○司会 ありがとうございます。

以上で平成29年度第1回総合教育会議を閉会いたします。お疲れさまでした。